



「支え合いマップづくり」は、
どのような問題から誕生したのか？

長い間、私は福祉の関係者として携わっていますが、福祉に携わる関係者は、困っている人などを、どうかしてあげたいという気持ちで仕事をしています。しかし、地域の中で孤立してしまう現状があります。

はじめは、どうして福祉サービスが充実してきているのに、孤立してしまう人がいるのか、不思議に思っていました。そこで、考えに考えた末、地域には地域のやり方があるのではないかと

と思ったんです。たぶん、福祉の専門家が考える対策は、地域に合っていないんじゃないかと着目したんです。

そこで、住民たちは日常生活でどうやって支え合っているのかを調べてみたんです。

20年前に栃木県足尾町で調査をしたことが初めてでした。そこで『住民流のまちづくり』はこれだと確信したんです。

地域にどんな人が住んでいるのかをただ調べても何も見えてこないですよね。住民からは、話そうとしないんだから。そこで、町会長さんや地域のこ

住民主体の助け合い起こし 「気づき」を感じた人は、 課題が見つかり、 行動へ

住民流福祉総合研究所所長

木原孝久さん

【プロフィール】

東京生まれ。早稲田大学第一政治経済学部卒業。中央共同募金会勤務を経てフリーに。「住民流福祉総合研究所」を創設、30数年にわたり住民流の福祉の在り方を追い求め、月刊誌「住民流福祉」（「元気予報」改題）や福祉関連マニュアルを発行のほか、研究会やセミナー開催。また自治体や民間福祉機関の事業（「地域福祉計画・活動計画」の策定など）を支援。「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」（厚生労働省社会・援護局／2007年10月～2008年3月）メンバー。現在、「住民の支え合いマップ作り」や住民流福祉のまちづくりなどを推進・普及中。講演、執筆、ラジオ・テレビ出演など。神奈川県立保健福祉大学非常勤講師。（財）さわやか福祉財団評議員。埼玉県在住。

とをよく知っている人たちが集まって、話し合いをしながらマップづくりをしてみたんです。そしたら、人と人とのつながりがわかってくるんですよ。わかるということは、その地域の支え合うやり方がわかるんですよ。そして、マップづくりを経験していくと、約50世帯の範囲で、5人くらいの情報通の人から聞くと、一番効率がいいこともわかったんです。

「支え合いマップづくり」の目的は？

近年は、孤立死の問題が叫ばれています。その問題を考えた場合、丁寧に情報収集を行わなければなりません。マップづくりをしてみると、線で結ばれない人たちがいますので、地域でその人たちを、どう支え合うのかという課題が見えてきます。マップに地域の情報を記載するということは、必ず課題が見つかります。これが一番の目的ですね。そして、助け合いのまちを実現するために、その課題にどう立ち向かっていくのかを考えて、前進していかなければだめですね。

また、「支え合いマップ」は防災でも役に立つんですよ。

国が進める災害時要援護者支援制度というものがあります。この制度は、災害が起きて避難するとき、助けてほしい人は、この人に助けてほしいと意思表示をして登録する制度です。しか

し、地域の中では、意思表示をしない人がいますよね。意思表示をしないからって、放っておくわけにはいきませんよね。そこで、「支え合いマップ」が役に立つんです。地図上に結ばれた線を見れば、どの人とつながっているかがわかりますよね。意思表示しなくても、線につながっている人に「もしものときには、あの人をお願いね」と言っておくだけで、避難する初期動作が違いますよ。

マップづくりから、住民の「気づき」が生まれる！

「私、地域のことを知っているつもりだったけど、知らないこともたくさんあった」と、マップづくりをしてびっくりしたという話をよくいただきます。これは、日常生活で見えていないものが見えたということですね。見えるということ、課題が見つかる、なんとかしなければならぬと行動が始まる。これはすごいことです。そして、「気づき」を感じた人は、今まで以上に地域のことを見るようになっていくんですね。そして、次の行動では、地域にもっと関わろうと行動を起こすんですよ。

次に、今まで自分のことや家庭のこととは人に言うものじゃないと思っていたことが、周りに話すようになるんですよ。考え方が180度変わるんですよ。例えば、家族に認知症の人が

いれば、普通は人に言いたくないよね。けど、「気づき」があった人は、「お父さんは認知症だから頼むよ」って、近所の人に話すんですよ。そうすると、家族は気持ちが悪くなり、近所の人にも、気にしてくれるようになるんですよ。こんな現象が始まると、「実を言うと、私の家族にも…」なんて言うようになり、お互いに支え合う関係ですよ。安心安全なまちになっていくんですよ。マップづくりには、心を開く効果もあるんですよ。

地域福祉やまちづくりは、50世帯の範囲で考える！

町会には、100世帯や200世帯の町会がありますが、地域福祉の観点からは、約50世帯程度に分けて考えてほしいですね。一番理想の範囲になります。なぜなら、地域の住民が主体的に取り組むことが必要だからです。100世帯を超える範囲になると、目が届かないですよ。50世帯くらいの範囲は、だいたいどこに誰が住んでいる、どうつながっているかがわかります。そして、この範囲だと、お互いになにかしようという気持ちも生まれやすいんですよ。

また、行政にもこの範囲から地域福祉の在り方を考えて、制度や仕組みを考えてほしいですね。

七尾市に住んでいる私たちは、人と人とのつながりが弱まってきていることや、地域の力が低下してきていることなど、心の片隅で少しは感じているのではないのでしょうか。自助（自分のことは自分ですること）、共助（地域など、お互いに助け合うこと）、公助（公的なサービス）の理想とする姿が、現状と合っていないことがひとつの原因といえます。

現状では、自助が著しく弱まり、公助に頼りてしまいがちです。しかし、公助にも限界があるため、自助の力の底上げが必要となります。各地域の特色は同じではありません。各地域の独自カラーがあり、地域で抱える課題もさまざまです。しかし、共通する課題もあります。人と人とのつながりを強め、その力を課題解決につなげる。こと。わかつてはいるけど、簡単にはいかないことです。

前へ進む手段のひとつとして、「支え合いマップづくり」を活用。このマップづくりに取り組めば、魔法のように課題が見つかる場合があります。そして、人の心のやる気まで掘り起こしてくれます。今後、モデル地区になった2町会には、どう変わっていくのか、今後注目です。